

遊育

'24No.
2/12

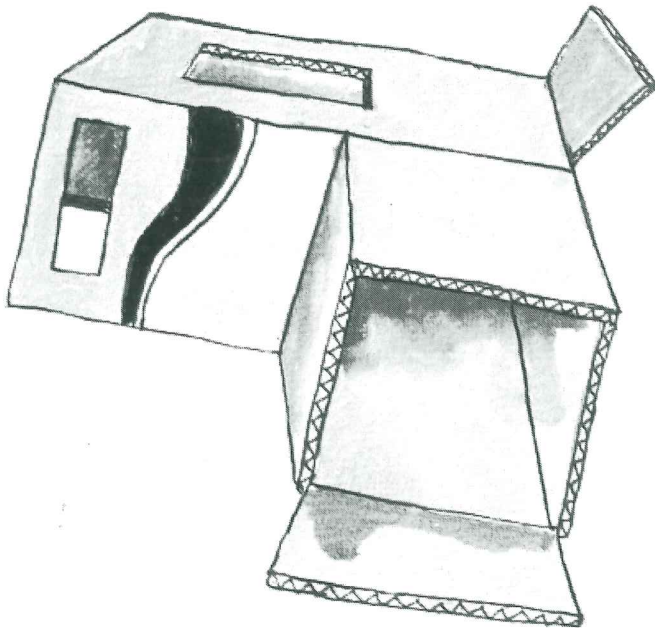
3

U-iku

The Biweekly Magazine
for Education and Care

平成8年2月7日 第三種郵便物認可 2024年2月12日発行 第32巻第3号 毎月第2・第4月曜日発行

次期要領の見直しを視野に入れた論議が始まる
能登半島地震続報、物資支援事業スタートなど
加速化プラン推進の保育対策関係来年度予算案
参加を通じて幼児教育の重要性広めるレッジョ



うちの園の宝物 ③7

園で大切にしている事物を通して、園の保育理念や教育哲学を語る

東京ゆりかご幼稚園(東京都八王子市)

内野彰裕園長

ありのままを感じる「もりのひろば」

東京都八王子市と町田市に広がる七国・相原特別緑地保全地区の丘陵地帯に「東京ゆりかご幼稚園」はある。

「子どもの園」を提唱したフレーベルの思想や北欧の「森のようちえん」の実践、かつての日本に見られた里山保育など、これまで幼児が主体的に自然に関わることの大切さが唱えられてきた。大学院で幼児の自然体験や園庭の築山を専門に研究してきた内野彰裕園長が現在地と巡り合い、本格的に自然と親しむ保育を展開したいと、平成26年、移転してきた。

園庭につながる森は広さ45ヘクタール。移転当初は荒地だったが、犬の散歩中に一目ぼれしたという「こならじいさん(コナラの老木)」をシンボルツリーとし、一帯を「森のひろば」として整備した。コンセプトは、「ありのままの自然、ありのままの心、ありのままの笑顔」野性味あふれる自然に接することで、子どもたちは素直な心を育て、笑顔になる。その上で、調和のとれた教育を展開し、子どもの主体性を育むことを教育方針としている。

子どもたちは高低差が大きく木の根っこでデコボコした道をサーキット・ラリーし、傾斜地にある木の枝から吊り下げられた縄ぶらんこで空中に飛び出し、自然を生かしてたくましく遊ぶ。その一方で、毎晩、タヌキやキツネ、ノウサギ、アナグマ、テンなどが訪れるという園庭でその痕跡を見つけ、飛来した野鳥の姿に接して自然への興味を掻き立てられ自然観察にも勤しむ。そうした過程でムササビに遭遇した。巣箱を作り園内6箇所を設置すると早速姿を見せ、出産、子育てをするように。専門家の教えを請いながら、ムササビの生態について観察するなど学びを深めた。テンがムササビを捕食することを知り、巣箱に上ってこられないようにすべりやすいトタンを巻いた。こうした体験を通し、ムササビへの気持ちが大きくなり、歌を作り、劇を作つて表現。しかし、劇で様々な役を演じる中で、天敵のテンにも家族がいて森の中で子育てをしているかもしれないことに気づき、一方的に悪者とみなすことはできないことにも思いが至った。

ありのままの自然と接しているため、その盛衰も目にする。全国的に流行する「ナラ枯れ」によって伐採せざるを得なくなつた樹木がでてきたので、森を維持するために各所にどんぐり畑を設け、どんぐりから苗木を育てている。こうした場面も子どもたちの学びにつながっている。深く自然と触れ合う中で、この自然を維持するためには何が必要か、自分には何ができるかを考えるだけではなく、自分も自然の一部との認識も育ち環境を守るために行動する力に結びつく。持続可能な社会の創り手として、地球市民の意識を育む現場が「森のひろば」となっている。



↑ムササビ。
↓こならじいさん。



↑内野園長の常時観察中。メラ部をモタサビ園